



2015 Winter vol.28

SEASON



ISSN 1349-3760



Special Column



企画展示をご存知ですか？



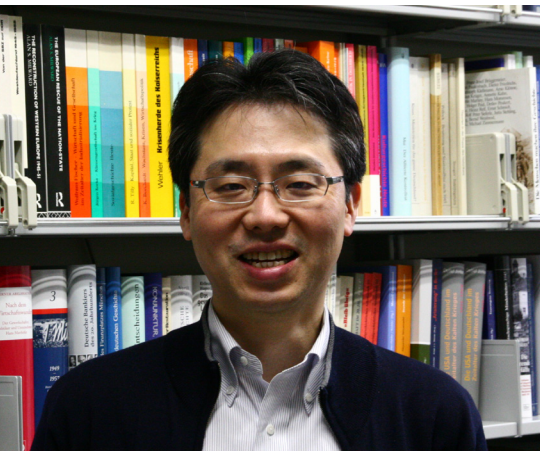
SBW 読書講演会



図書館書簡

「図書館への思い」

経済学部
西田哲史 准教授



私の専門は社会・経済史という分野で、とりわけ第2次世界大戦後の(西)ドイツの復興・再建期の時代を中心に研究している。歴史学

ということもあり、図書館や文書館を利用する機会が非常に多い。とくに図書館という空間には一種独特な雰囲気が漂っているように思う。それは古書から最新の書籍にいたる膨大な数の書物が放つ香り、音、空気の流れとそこに集う人間が織りなす微妙なハーモニーとでもいえるだろうか。今でも図書館に一歩足を踏み入れると心地よい緊張感がある。

私が15期生として創価大学・経済学部に入学したのが1985年。当時は池田記念講堂や工学部棟もまだ無く、正門を入れて右手に凜と立つ中央図書館の雄姿が鮮明に眼に焼き付いている。学部生、また大学院生時代を通じて中央図書館を実によく利用させていただいた。定期試験前はもちろん、レポートの作成、ゼミの報告準備のときだけでなく、時間が空いたときには小説・雑誌・新聞などを読んだり、事ある毎に足を運んでいた。当時は今のよう

報にアクセスできる環境などは無かったので、ドイツ語の新聞が読めたりする環境は本当にありがたかった。また、大学院生になると書庫に入れるという、当時でいえばちょっとした特権を得られるわけだが、この書庫内にある閉架図書を実際に閲覧出来るようになってから初めて、中央図書館が実に多くの貴重な、また希少な書籍や資料を所有していることを知り、時に興奮し、また感動もした。

ところで、私事で恐縮だが、私はこれまで長期にわたるドイツ留学を2度経験している。最初が学部4年生だった1988〜90年の約2年間で、ドイツ連邦共和国(当時の西ドイツ)の首都にあるボン大学でドイツ語と経済史を学んだ。2度目は、1994年の秋からビーレフェルト大学の哲学・歴史・神学部に博士論文執筆のために籍を置き研究する機会に恵まれた。そこでもまた大学へ行けば必ず図書館に足を運ぶのが日課となっていた。ボン

大学の図書館では、ドイツ語の専門書と辞書を片手に格闘していたのを覚えている。また、私を研究者の道へ誘うことになる一書に巡り会ったのもこの図書館であった。他方、ビーレフェルト大学の図書館を初めて訪問したときには、そのスケールの大きさに文字通り度肝を抜かれた。利用者がゆったりと勉強できるように2050名分の机と椅子が用意され、その蔵書数は220万冊を越える(2013年現在)。驚かされるのは、その大部分(約95%)が開架図書で実際に自分の手に取って見ることができることだ。因みに、ビーレフェルト大学は、第2次世界大戦後の人口増加と就学率上昇を背景に、創価大学とほぼ同時期の1969年に「改革大学」とのスローガンのもと、数学、法学、社会学の3学部、260名の学生数で開学したドイツでも歴史の浅い大学である。その後、学部数も増え、22000名の学生数を擁する総合大学となって現在に至っている。

冒頭、専門分野が歴史学ゆえに図書館や文書館を利用する機会が多いと書いたが、2011〜2013年までの3年間、研究助成金をいただき、史・資料の収集を目的に毎夏ドイツの大

学図書館や複数の文書館を訪れる機会があった。とりわけ印象に残っているのは、ライン川の東方に位置し、ルール工業地帯を代表する工業都市の一つでもあるポーフムにある鉱山文書館(Bergbauarchiv)の訪問であった。この文書館は1930年に設立された鉱山博物館(Bergbaumuseum)に付属する機関で、小さな図書閲覧室が同博物館内に併設されているだけである。もちろん所蔵されている史・資料は膨大な数にのぼり、そのなかから研究に使えるような文書を探すわけだが、どこから手を付けて良いのか分からない状況のなか、まるで自分のことのように親身になって種々アドバイスしてくれる研究員やスタッフの方達には頭の下がる思いであった。こうした人たちの尽力のおかげで自分の研究が成り立っていることを再確認することができた。

閑話休題。2006年から母校の教壇に立たせていただき、それ以来、再び中央図書館を頻繁に利用する機会があるが、現在の中央図書館は、私の学生の頃と比較すると、何倍もその利便性が向上していることがわかる。

各種サービスの充実はもちろんのこと、個人学習室やセミナー室と多数のパソコンを備えた4階閲覧室が増設され、1階には語学学習エリアが設けられている。さらに学部生でも条件さえ満たせば閉架図書の閲覧も可能になるなど、常に学生を中心に据えた発展の軌跡を見て取ることができる。

図書館が「知性・資料の宝庫」であることは論を俟たない。加えて、ドイツの文豪ゲーテが「書物は新しい知人のようなものである」という言葉を遺しているように、図書館には書物の数だけ新しい出会いがあるとついよ

企画展示をご存知ですか？

中央図書館では月に一度、企画展示という特定のテーマに沿った本の展示コーナーを設けています。今回は2014年に行われた展示の歴史をご紹介します。
図書館にお立ち寄りの際は覗いてみてはいかがでしょうか？
今まで気にとめなかった本と出会いがあるかもしれません。

HISTORY

4月 図書館 × ∞

図書館×読書、図書館×音楽、図書館×映画、
図書館×スポーツ、図書館×美術…など
新入生を迎える季節、図書館にある様々な
ジャンルに渡る資料をご紹介します。



5月 飛びたて、創大生！！

ご存知ですか？創価大学は何と
「世界47カ国、142大学」に留学する事が
できます。「留学って何をするの？」
「どんな国で学べるの？」そんな疑問に
答える、たくさんの図書を用意しました。



6月 就活！図書活！

就職活動をしている学生(3.4年生)向けに
マナーや服装、面接のハウツー本を紹介。
これから就職活動に臨む学生(1.2年生)
には、「どんな職業があるのか」「働く
とはどういうことなのか」などの悩みを
解決する本の紹介をしました。



11月26日、文学部准教授の伊藤貴雄先生をお招きし、Soka Reading Project 主催の「読書講演会」を中央図書館ブラウジングルームにおいて開催しました。今回の講演会はショウペンハウエルの「読書について」を題材に、参加者とのディスカッションも交えながらの講演となりました。

参加者からは「ショウペンハウエルの主張が自分の考えと一致していてうれしく思った」「著者の意図することを多角的にするべく解説されていて感動した」「なぜ自分の哲学を持つことが大事とされるのか、答えを出せそうな気がした」「もつとこのような講演会を開いて欲しい」「短大生なので、創価大の教員のお話が聴けて良かった」など、大変にご好評の声をいただきました。

SBW 主催読書講演会

「哲学と文学を語る」

伊藤貴雄文学部准教授





2015年1月 ^{NOW!} 創大生のオススメ

2014年の夏から図書館に設置して学生の皆さんに募ったアンケート。寄せられた本の数は100冊以上!! 同期の友達や先輩はどんな本を読んできたのか・・・が分かります!

アンケートに寄せられたオススメポイントの一部を紹介します

この本はココがオススメ!

知識を、知能を手に入れたら、そして、いずれそれらが失われるものだとしたら、人は何を残せるだろうか。過去と向き合い、現実と向き合う。人にとっての幸福を考えさせてくれます!

『アルジャーノンに花束を』

学ぶことの楽しさを知っているあなたにこそ読んでほしい

一流を目指す創大生には必読の一書だと思います。

『一流たちの修業時代』

『機龍警察暗黒市場』

テロリズムなどからめたSF。作中に時事問題をモチーフとして使用しているため勉強にもなる

『生き心地の良い町』

～この自殺率の低さには

理由がある～』

少しでも自殺を減らしたいという思いから、既存の視点からではなく、新たな観点から研究に挑む姿勢に感動です。研究結果も画期的です。社会科学の真髄を見た気がしました。



9月 体感・音感・TOSHOKAN



短編という短くも凝縮された世界。

聞いて、見て、楽しい。
図書館にあるのは本だけではない。

11月 短編小説の世界

12月 運動するなら図書館で

思考だって運動するんです!

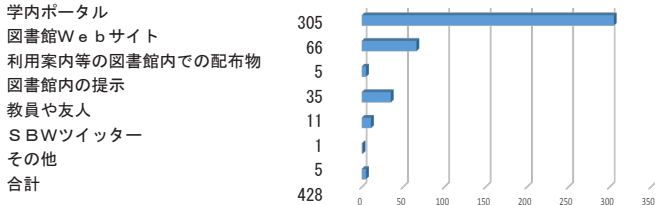


図書館利用アンケート結果発表

回答実施期間：2014年11月7日（金）
～12月7日（日）

回答者数：学部生： 248名
大学院生： 15名
通教生： 2名
短大生： 43名
教員： 18名
職員： 3名
その他： 1名
合計： 330名

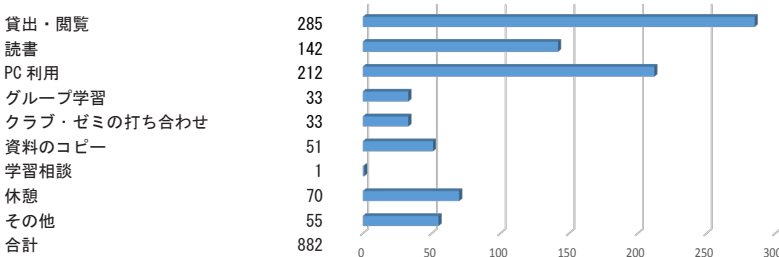
Q：図書館からのお知らせを何で知りますか？（複数回答可）



～図書館から～

「ポータルサイトから積極的にお知らせをしております。」

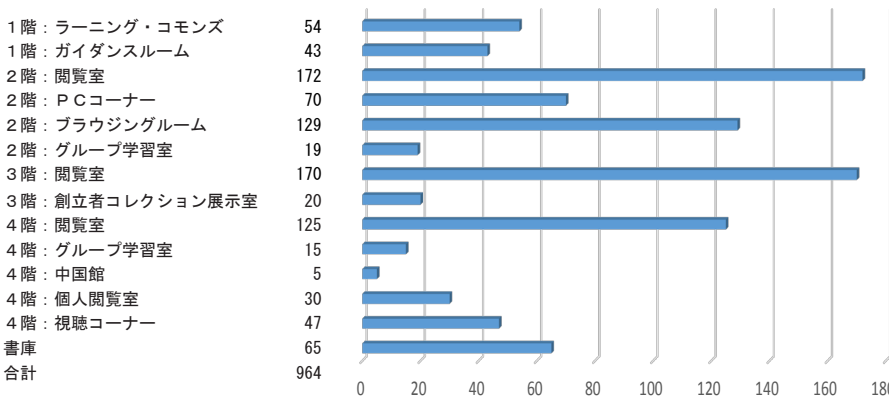
Q：中央図書館を利用する目的は何ですか？（複数回答可）



～図書館から～

「貸出・閲覧についてPC利用や読書が多いようです。」

Q：中央図書館のどの施設・設備を使用しますか？（複数回答可）

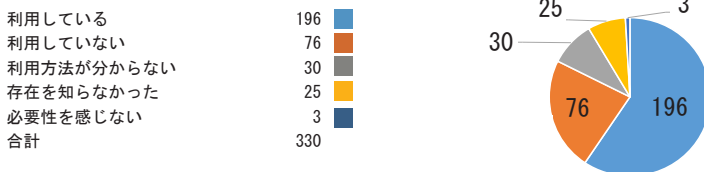


～図書館から～

「過ごしやすい図書館を目指して、イスやソファの入れ替えなどを図っております。」

Q：図書館のデータベースや

電子資料（電子ジャーナル、電子ブック他）について



～図書館から～

「便利なデータベースを1/3の方が利用していないようです。データベースガイダンスなどの企画を充実させてまいります。」

Q：中央図書館の利用頻度はどのくらいですか？

